



令和7年度～関東・全国大会特別号～

Table Tennis Specialty Department
Saitama Junior High School Physical Culture Association

関東大会・全国大会出場への道

埼玉県中体連卓球専門部マガジン

部活動で強くなる



埼玉県中体連卓球専門部強化部



今回の執筆者は、関東大会出場や全国大会出場を目標としている先生方をお願いしました。少数ですが長文になります

1 小井戸健太 2 河本晃紀 3 初手 航 4 藤原麻衣 5 芳賀貴裕

① 全員中学スタート、部活動だけで関東大会に4年連続出場達成！

騎西中

はじめに、私の勤務する騎西中学校の目標は毎年、「**団体での関東大会出場**」になります。高い目標ですが生半可なことではこの目標は達成できません。この目標を達成するために私と生徒たちが共に歩んできた歴史の1ページを紹介いたします。ちなみ騎西中は**今までクラブ所属の選手や小学校から経験してきた選手が一人もない状況(全員が中学スタート)**での挑戦となります。これから騎西中の初年度から関東大会に騎西中として初めて出場が叶った令和3年度までを振り返っていききたいと思います。

まず私が騎西中学校に異動した当初はというと、正直勝とうとする集団ではありませんでした。楽しんで部活ができればOK という状況で、地区大会では予選リーグで負けてしまうチームでしたが、当時の2年生たちには**“勝ちたい気持ち”**がありました。そこで生徒たちのやる気と私の今までの指導のポイントを活かした指導がうまくマッチして、その年の新人戦で何とかギリギリ女子団体において県大会出場に滑り込むことができました。今思うと、この時が私の指導してきた騎西中で最も大変だった時期だったかもしれません。

そして、**この県大会出場が良い流れを作り出し**、その後の生徒たちの活躍につながりました。まずは男子が翌年、新人県大会で3位(レギュラー全員がペン粒高という前代未聞のチーム)となり、騎西中史上、初の**関東選抜大会出場**となりました。この代のチームは夏の学総体でもベスト8(念願の関東大会には団体では出場できず…)入賞となりました。そして、次の令和2年度の代も男子が新人県大会で前年と同様に3位入賞、女子に至っては、なんと**準優勝**という好成績を残しました。念願の夏の関東大会出場達成のため、この年度は幸先の良いスタートが切れました。と思った矢先、**ここからコロナが始まってしまい**、関東選抜大会は中止となり、夏の学総体はおろか、関東大会(栃木大会)も中止となってしまいました。この代は新人戦での結果を見ると男女ともに関東大会出場のチャンスが大いにあっただけに大変残念でした。

そして、コロナが少し落ち着いた翌代の**令和3年度の女子での関東大会出場への再挑戦が始まりました**(男子は3年生の人数が4人で頑張ったのですがさすがに…)。繰り返しますが、小学校からの経験者や、クラブチーム所属の選手無しで、関東大会出場は困難を極めます(埼玉県でも直近10年程度を振り返ってみても同条件での関東大会出場はほぼ皆無でした)。この状況での挑戦となりますので勝つためには選手も指導者も相当の覚悟が必要なのが明らかです。

話を戻すと、**この代の女子チームの特徴は“ザ・カットマンズ”**となります。構成は、その名の通り、シングルのレギュラー4人全員がカットマンで、ダブルスだけがペン粒コンビというもので、カット打ちが苦手なチームにとっては大変脅威でした。ただ新人県大会では最後の代表決定戦で2-2のラストでゲームもファイナルまでいったのですが、最後ギリギリ競り負けてしまい7位となり、6校まで出場できる関東選抜大会へは、あと一歩のところまで出場が叶いませんでした。5番で負けた選手や周りの選手たちの悔し涙が今でも私の心に鮮明に残っています。しかし、ここでよくよしてはいられません。選手たちは次の目標を夏の関東大会出場に切り替え、険しい関東への道のりが再スタートを切りました。

ただそうは言ってもコロナ禍であったため、中々思うような練習ができたわけではありませんでした。そんな中、助けてもらったのが**OB・OG**でした。

他の学校との練習試合が制限され、自分たちだけでは練習の内容に限界がある中、関東などへの上位大会に出場経験がある卒業生たちの助けは大変ありがたかったです。そして、様々な苦難を乗り越え、夏の学総体本番が始まりました。

カットマンチームはここでも脅威で、多くのチームに効果的でした。おそらくコロナ禍で練習量が制限された状況では守備型対策が多くの学校で手がまわさなかったことが功をなした結果だったと思います。スルスルとトーナメントを勝ち上がり、**準々決勝まで進み、優勝候補の**



関東大会第5代表は、同じぐらいの力の相手と何度も戦い、勝たなければ達成できない。その分達成できた喜びは計り知れない。

日進中との試合となりました。ここでもカットや粒高が効いて、5台展開でしたが立ち上がりを攻めて、最初の1ゲーム目を2人の騎西中の選手が先取し、残りの選手たちも好ゲームで、このまま行けばワンチャンスで勝ちもあるかもしれないという状況になりました。しかしコロナがここでも立ち上がりはだかりました。コロナ禍のため**2時間に1回喚起タイム**を取らなくてはなりません。

その喚起タイムがこの勝負どころで、きてしまったのです。喚起タイム中は監督やアドバイザーはアドバイス可なので、まさにタイムアウトと同様です。そこで気持ちを落ち着かせた日進中の勢いは蘇り、その後はあっという間に3本取られ敗戦となりました(試合後に日進中の監督の先生と話したところ、やはり騎西中に始めは勢いがあった、もしかしたらという場面もあったが、喚起タイムのおかげでチームが落ち着いてと言っておられました…)

その後、関東大会第5代表決定戦にまわり、ラストチャンス(埼玉県ではベスト4に残った学校が関東大会に出場が決定し、残りの1枠をベスト8とベスト16で敗退した学校を抽選し、第5代表決定トーナメントを作成し、勝ち上がった1校が関東大会に出場するシステム)を生かすこととなりました。**ベスト8の学校が関東大会に出場するには、3回勝たなければなりません。**代表決定トーナメントの初戦は新人県大会で、関東選抜に出場した6位の学校との対戦でしたが、ここでも本戦でカットが効いたのと同様にこの試合でも効果が絶大で3本をトントンと先取して勝たせていただきました。

そして次の相手こそが新人県大会で関東選抜への道を閉ざした相手そのものでした。半年前のリベンジを願って、選手たちがこの間、根気強く練習に臨んで頑張ってきたことを証明するためにも絶対に勝つという強い意志が感じられた試合でした。

そして試合はというと1番が相手の攻撃選手に勝って1-0、2番が相手のエースに取られて1-1、ダブルスが完勝で2-1、4番が相手の2番手に競り勝ち、3-1で勝利しました。リベンジが成った生徒たちのうれし顔が印象的でした。そして最終戦です。相手は何度も女子団体で上位に進出している県の常連校、勝負は五分五分です。相手には絶対的エースもいる状況なので、オーダーも含め、チーム一丸で挑まなければいけません。オーダーを交換し、いざ勝負です。

勝負どころの試合は、どこも競りましたが、結果は3-2、難しい第5代表決定戦に勝利し、**第5代表として騎西中史上、初の関東大会への出場**となりました。

ここまで挑んできた関東大会出場への夢。それが5年目にして成就した瞬間でした。このあとの関東大会(東京大会)本番は勝つための準備は正直行ってこなかった状況で、そんな形で挑んだ関東大会では、勝てるはずもなく、予選リーグで千葉県二位の松戸六中、茨城県三位の十王中

女子 団体戦 第1ステージ

Gブロック	① 松戸六	② 十王	③ 騎西	勝数	負数	順位
① 松戸六(千)		3 - 2	3 - 1	2	0	1
② 十王(茨)	2 - 3		3 - 1	1	1	2
③ 騎西(埼)	1 - 3	1 - 3		0	2	3

にどちらも1-3で敗れ、予選リーグでの敗退となりました。

ただ、コロナ禍で部活動の中学スタートの選手のみ、土日の社会体育活動も無い、夜練習も無い、外部の指導者もいない、そういった状況の中で関東大会出場を目指すという高い目標を達成できた生徒たちを私は改めて誇りに思いました。

また、この代が礎となり、**騎西中はこのあとの令和3~6年度の4年間の中で、男子は2回、女子は4年連続で関東大会に出場**することができました。

すべてが全員中学スタートで、部活動のみでの結果となりますが、この結果に至るにあたって毎年、多くの方々に支えていただきました。この場を借りて改めて御礼を申し上げます。ありがとうございました。

加須市立騎西中学校男女卓球部顧問

小井戸 健太



関東大会の雰囲気は他の大会と全然違う。
この雰囲気を毎年、生徒たちに味わせてあげたいと思うが、その道は険しい。

② 卓球部顧問になって5年目の集大成！ 初の関東大会出場！

卓球部顧問を始めて5年、今年**初めて女子団体で関東大会出場**を成し遂げることができました。今回は関東大会出場の思い出ということで長くなりますが、思いを語らせてください。

まず、和光二中は、部活動の数が非常に少ないです。その結果、R5年度の部活の構成は「2年男子:21名、女子:1名、1年男子:28名、女子:11名」と、かなり男女に偏りがあり、非常に人数の多い部活となってしまいました。男子は合わせて50名近くいるのに対し、女子は11名しかいません。しかも、2年女子は1名です(先輩たちによる筋肉を前面に押し出した勧誘により、1名しか入ってきませんでした涙)。

この時点で入部してきた**1年女子の5名は、レギュラーになれる状況**でした。今思えば、これがすべての始まりだったのだと思います。満足に台ありませんでしたが、たくさん練習し、いろんなところで練習試合をしました。そしてR5年度の学総では、3年女子1名以外すべて2年生のチームで県大会出場を決めました。これが大きな自信となり、さらに練習に励むことができました。

ただひたすら卓球をやっていたら、「**関東大会狙えるよ！**」と**うれしい言葉をかけていただく**ことが増え、たくさん練習試合や大会に呼んでいただけるようになりました。たくさん経験を積ませてあげることができたことが、彼女たちの成長につながったのだと思います。

和光二中

そしてなんといってもこの代は、男子もかなり頑張っていました。**男女とも互いに切磋琢磨しながら一緒に練習し、遠征し、喜びや悔しさを分かち合いました。**女子のおかげで練習試合を組んでいたのに、気がついたら男子のおかげで女子が練習試合に呼ばれるようになりました。お互いどんどんと力を高め、いろんな大会で実績を残し、関東大会を目標に努力し、とうとうR6年度の学総体を迎えました。

自分は**男女とも関東大会出場を本気で狙っていました。**しかし、くじ引きの結果、県大会の組み合わせはなんと第1シードの山…ベスト4で関東大会出場するという希望はかなり望み薄となってしまいました。こうなったら！と切り替えて第5代表狙いでいくことにしました。**いばらの道の始まりです。**

まず、**男子団体。**本戦ではベスト16止まりとなり、**第5代表決定戦トーナメントでは4回勝たなくてはいけなくなりました。**なんとかオーダーの運も味方し、東松山北中・青柳中・草加中と強敵をなんとか倒し、日進中との代表決定戦となりました。**結果は完敗。**あの負けてしまったときに、泣いていた部長の姿を忘れることはできません。その夜、先輩方から「**チャンスは2倍、明日の女子団体もあるからしっかり切り替えていこう**」と言葉をかけていただき、モヤモヤしながら次の日のために寝ました。

そして、**女子団体。**本戦では初戦を何とか突破し、ベスト8決定戦で日進中と当たりました。昨日の男子のことが頭をよぎりましたが、「男子の仇を取ろう」と集中して臨み、結果3-2で辛くも勝利し、ベスト4決定では越谷富士中に粉砕されました。第5代表決定トーナメントは、くじ引きで組み合わせが決まります。その中でも、美原中さんとはやりたくないな…と思っていたら、なんと初戦が美原中でした。**正直、この時若干もう諦めていました。**昨日の負けが頭をよぎ、勝って終わるイメージが湧きませんでした。その時、小井戸先生から「先生のところ関東のチャンスあるよ！いけるよ！」と励ましの言葉をいただきました。そして、諦めかけた結果なんとか美原中に勝つことができました。その次に吉川東中さんとの試合もその勢いで辛勝し、**いよいよ第5代表決定戦**となりました。



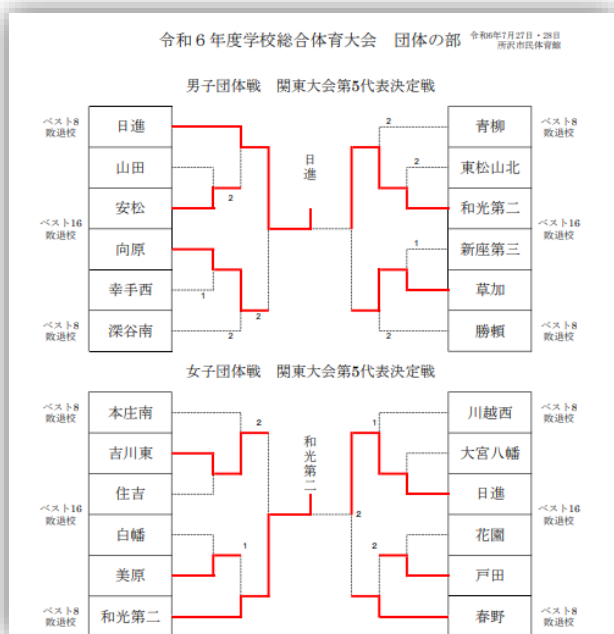
団体戦はチーム全員の力が試される。そこで勝てれば、一勝の思い出となるはず。

「さあ相手はどこだ！」と息巻いてみるとなんと日進中でした。「またか…また決定戦で日進中に負けてしまうのか…さっきもやったのに…もう一回オーダーが当たるわけない」とかなり絶望していました。そんな私に、新座二中の先生が「先生、諦めてるでしょ？子どもたちにその雰囲気は伝わってしまうよ。**嘘でもいいから堂々としなさい**」と声をかけてくださりました。その一言にハツとなり、子どもたちを鼓舞しようと決めました。「日進中がくるなんてラッキーだ！いけるぞ！」なんて思ってもいないことを口に出し、ニコニコし、**堂々と振舞いました。**

いよいよ始まった決定戦。オーダーが完璧に近い形であたりました。相手の1番手に4番手が、2番手に1番手、3番手に2番手、4番手に3番手が当たり、「いける！」と思ったのも束の間、なんと団体0-1の状態、すべての台でゲーム数1-2と大負けしていました。しかしこちらの1番、3番がフルゲームで勝利し、**こちらの2番手と相手の3番手の勝負**となりました。

ゲーム数2-2で9-4とリードを広げました。勝負がかかった日進中は強く、そこから連取されてしまい9-6となりました。そこでこちらからタイムアウトを取り、水を飲ませて落ち着かせ、「**この試合が今日の最後なんだから思い切って楽しんで**

やってこい！」と送り出しました。サーブ3球目で1点取り10-6。相手の3球目ループをカウンターして11-6。結果3-2で勝利することができました。そして、**初めて関東大会出場の切符を勝ち取りました。あの瞬間は忘れることができません。**一生の思い出です。子どもたちと一緒に戦える団体戦はなんと素晴らしいものなのでしょうか。**県大会の2日間で地獄と天国の両方を味わいました。**酸いも甘いもかみしめて、関東大会に立ち向かっていきたいと思います。



第5代表決定戦で男女共に決勝まで進めたのは素晴らしい。
男子の分まで女子は関東大会で頑張ってきて欲しい、

女子団体が関東大会出場することができたのは、日ごろから共に練習に励んだ男子部員、たくさんの支援をいただいた保護者の方々、共に悩み考え支援してくれたコーチ、たくさん練習を見に来てくれたOB・OGのみんな、練習試合などをしてくださった顧問の先生方、一緒に高めあった他校の選手たちなど本当に多くの人々のおかげです。**埼玉県代表として恥じない試合をしてきます！**ありがとうございました！

和光市立第二中学校男女卓球部顧問
河本 晃紀

③「県で1番応援されるチーム」を目指し、全中へたどり着いた2年半！

狭山中央中

前任校である所沢市立三ヶ島中学校の話については、今までの専門部マガジンでも何度か取り上げてきましたので、今回は狭山市立中央中学校に異動して、取り組んできた2年半についてお話をさせていただきます。初めての異動、決して良いとは言えない練習環境、市内最下位からの挑戦…それらを乗り越えてつかみ取ることができた県大会の頂。そして奇跡の全中出場。中学スタートの彼らがここまでたどり着くまでの軌跡を振り返っていこうと思います。

「市内最下位からのスタート」

三ヶ島中学校5年目にて、念願の関東大会出場、そして全国選拔出場を果たしました。6年目に突入できるのなら、この子たちの最後の姿を見届けたいと思っていました。ですが、その願いは叶わず、狭山中央中への異動となりました(次年度から初任でも6年目が認められるようになったことを知った日には、もう1年早くはじめてくれよ…と率直に思っていました)。狭山中央中に異動し、初めに見たのは練習環境でした。中央中は、**男女でギャラリーの卓球台6台+ステージ1~2台を用いています**(三ヶ島中は体育館フロアでがつつり練習できました)。その当時、ギャラリーの**6台中2台は足が壊れ、2台は全く弾まず、ステージの2台も壊れている**、カーテンはボロボロといった状況でした。これで市予選の会場が中央中と聞いて更に驚愕したのを覚えています。

次に見たのは子どもたちの様子です。練習をしている生徒は一部で、残りは座って話す子もいれば、部活をサボる子もいる現状でした。大会で勝ったこともなければ、練習試合も年に1度やるかどうか。打ち方もハチャメチャ。ツツツキという技術を知らない…。他の部活は県大会に出場するチームが多いため「うちの卓球部の子たちは…」といった印象を周りの先生からも聞いていました。

「目標の変化」

当時の3年生に話したのは「**目標を持つこと**」です。1年生が初めて見る試合は3年生の姿。この姿がどれだけ大きいかわかるが、**次のチームのモチベーションにつながる**と考えています。だからこそ、当時の3年生に話を聞いて、「どうせやるのなら、やってよかったと思えるように2か月頑張ってみよう。」と話をしました。そこからできた目標が「**①市内入賞**」でした。その後、ダブルスの強化と粒高を数人に貼らせて、それを活かすことに2か月を費やしました。ほとんどやったことのない練習試合(所沢東・美杉台・三ヶ島)も入れ、とにかく必死にやった2か月、「**団体市内3位、3年+2年のダブルスの2ペアが県大会**」に出場することができました。周りから見れば、県大会には出られない小さな市での入賞です。それでも、この子たちにとってはとても大きな入賞だったと思っています。この子たちが頑張った姿を見せたからこそ、次の代にとっても良いスタートを切ることができました。

新チームになったの目標は「**②市内優勝・県大会出場**」でした。2年生3人と1年生の子たちで組むことになる団体。とにかく実践を積むことが最優先だと考え、たくさん練習試合をしました。三ヶ島中の頃に練習試合をしていたチームを中心にお願いをしたところ、快く試合を受けていただきました(特に黒須中・野田中・美杉台中・新田中・東松山北中には何度も相手をしていただきました)。その結果、新人戦では「**市内優勝・県大会出場**」を果たすことができました。市内予選を終えた次の目標は「**③県大会ベスト16**」になりましたが、県大会では勝つことができませんでした。県大会に出場すると、レベルの高い場所で試合をする機会も増え、確実にレベルアップをすることができました。3年2人、2年4人で挑んだ学総では、黒須中に勝ち、「**県大会ベスト16**」という目標を達成することができました。

先輩たちが引退し、そして次の目標が決まりました。それは「**④関東選拔出場**」です。主力が半数以上残っていたため、十分にチャンスがあると考えていました。近隣の県の大会に参加したり、練習試合をしたり、高校の力をお借りしたり、子どもたちの夢を叶えるためにできることを考え、実行してきました。そういった積み重ねがあり、9月に行われた県の強化試合では「**1位**」になることができました。それと同時に大きな転機がありました。それは、「**⑤県で優勝して全国選拔出場**」という目標に子どもたちが変えたことです。スモールステップで決めてきた目標が、ついに県で1番になるところまで変わったのです。その目標に向けて取り組んできた結果、あと一步のところで負けてしまい、「**県大会準優勝**」となりました。その時の子どもたちの悔しそうな表情は今でも忘れません。新人戦が終わってからの次の目標をどうするのか、これを決めることに少し時間がかかりました。新人戦では「**県大会優勝→全国選拔出場**」になりますが、学総の場合は「**県5位以内→関東7位以内→全中出場**」とかなり狭き門です。「**女子はチャンスあるかもしれないけど、男子は私立+クラブ生が集まっているチームで7チーム揃うから絶対に無理だろう。**」という意見を多くの場面で耳にしていました。実際、3月に行われた関東選抜では「**⑥ベスト8**」を目標にしていたのですが、結果は東京の強豪校に敗れ、**ベスト16**でした。「さすがに全中は厳しいか…」と顧問としては考えていましたが、3年生になった子どもたちが最後に決めた目標は「**⑦県優勝+関東ベスト4で全中出場**」でした。理由を聞くと、「新チームになってから、一つも目標を達成できていない。1位を目指しても2位。ベスト8を目指してもベスト16。全中に出たいから関東ベスト8を目標にしたら、きっと同じ結果になる。だから、**県で優勝して関東ベスト4**を目標にしました。」と話がまとまったそうです。「こうなれたらいいな」ではなく「**ここを目指す**」という子どもたちの意思を感じました。そこから最後の学総まではあっという間でした。茨城の強化試合への参加、川越東高校への訪問、所沢北高校・



試合後、生徒とコミュニケーションを取りながら、その日の反省をすることは大切である。

ふじみ野高校との強化試合、専門部の先生方とのチームや多摩地区の先生方のチームとも積極的に練習試合をしました。そして挑んだ最後の学総。子どもたちは緊張する素振りを全く見せず、自分らしき溢れるプレーを存分に発揮し、悲願の「**県大会の頂**」に立つことができました。

そして埼玉県チャンピオンとして迎えた群馬関東。私にとって、一生忘れることのない大会になりました。予選リーグから各県の上位チームとの激戦が続きましたが、ここでも選手たちは臆せず立ち向かい、リーグ1位で決勝トーナメントに進出することができました。

決勝の2日目。決勝トーナメント初戦は栃木1位の強豪校。結果としては1-3で負けてしまいましたが選手たちは大健闘。内容を見ると、**子どもたちのプレーは今まで見た中でも最高のプレーをしていました**。試合後の選手たちの様子も「次勝てばいい」、「ここから勝負だ」と言わんばかりの表情。「これまで何百回と君たちの試合を見たけど、今日がベストだよ。ノンプレッシャーで試合をしたら負ける可能性が高い格上のチームばかりだけど、今日の君たちなら互角以上に戦える。全中行くぞ。」と話し、午後に向けて最終調整をしました。敗者復活の初戦は、同県代表の日進中。実をいうと、三ヶ島中時代に出場した関東大会で最後に敗れたチームです(敗者復活戦の初戦というところも同じ)。だからこそ、日進中との対戦は特別なものでした。速報を見ていた、三ヶ島中 OB からも「日進ですね。リベンジしてください!」というメッセージが来ており、なんとしても勝ちたいという気持ちが高まりました。

ここまで3試合の選手たちの様子を見て、ダブルスのメンバーを入れ替えて挑んだ日進戦。そのダブルスが奮起し、結果として3-0で勝利、3年越しのリベンジを果たすことができました。そして、全中決定戦。相手は茨城の強豪。うちが一度も倒したことがないチームを倒し、勝ち上がってきました。それでも、今日のこの子たちならきつといけるという自信が沸き上がりました。

「これが最後かもしれない。この2年半で積み上げてきたすべての努力をここで見せてくれ。」と送り出した最終戦。ペン粒の部長と準決勝で躍動したダブルスが勝ち星を挙げ、2-2の最後に回ったのはカットマン。臆することなく強気なプレーを見せ、見事勝利。念願の「**全中出場**」という目標を達成できました。**中学スタートで全中に出るという偉業を成し遂げた選手たちを素直に尊敬します。**



監督・アドバイザー・選手全員で
戦う雰囲気を作り出す。会場も一体
となって、全中出場へとつなげた。

「常に選手たちに伝えている「応援される選手・チーム」とは」

私は入部時から「**誰からも応援される選手・チームを目指してほしい**」ということを伝えています。卓球がどれだけ上手になったとしても、中学スタートの選手たちが卓球を職にすることは難しいです。また、強くなること・結果を残すことを全ての目標にすると、試合に出られない選手は絶対に達成できません。部に所属するすべての選手たちができることは「**どうやったら応援される選手・チームになれるかを考え、そのための努力をすること**」だと思っています。チームには、「誰よりも一生懸命練習し」、「誰よりも仲間を応援し」、「誰に対しても一生懸命プレーし」、「対戦する選手・チームをリスペクトし」、「与えられた環境を当たり前だと思わず」、「応援している人への感謝を忘れず」、「自分らしさを大切にする」ことを意識させるように心がけています。最後の県大会や関東大会であそこまで素晴らしいプレーを選手たちが発揮できたのは、今までのチームの中でも「応援される選手・チーム」という目標を限りなく高いレベルで達成できたからだと思っています。これは今の子どもたちだけの力ではありません。これまでいた先輩たちがこの土台を作りあげた先にあった結果だと考えています。

「**最後**」に、近年、卓球という競技がテレビでも注目を浴び、その影響もあってなのか、小学校から選手として何年も練習を積み重ねてきた選手たちが増えたように感じます。団体においても小学校から選手として取り組んできた選手たちが活躍する姿を多く見られました。それでも、**中学スタート軍団(クラブチーム所属0人)で立ち向かい、全中を勝ち取ることができた**のです。この子どもたちが、中学スタートでも、クラブチームの選手がいなくても、努力と工夫次第で、全中をつかみ取ることができるのだと証明してくれました。子どもたちがもつ「**無限の可能性**」を見ることができた2年半でした。

子どもたちがここまで成長するために、本当に多くの方からのご支援・ご協力をいただきました。特に川越東高校の坪井先生、入間向陽高校の吉川先生(所沢西高校)、TRYAGAIN の岡田さん・粕谷くん、桐朋中の富永先生・立川七中の佐藤先生・小金井一中の仙澤先生をはじめとする多摩地区の先生方、東松山北中の河野先生には何度も何度も相手をしていただきました。他にもふじみ野高校、所沢北高校、鷲宮高校、狭山清陵高校といった高校の先生方・選手たち。これまで練習試合をしてきた中学校の先生方・選手たち。三ヶ島中・狭山中央中の卒業生。大学時代の同期や先輩・後輩。

どこに遠征しても背中を押していただいた保護者の皆さま。日頃から共に指導をした塙コーチ。頑張っている子どもたちのためにと卓球台を寄付していただいた地域の方々。普段からともに過ごしてきた中央中の職員の方々。そしてともに切磋琢磨し、応援していただいた専門部の先生方。本当に数えられない方々に支えられ、応援されたからこそつかみ取った全中です。三ヶ島中に着任し、卓球専門部に入り、狭山中央中で取り組んできた8年間の全ての出会いに感謝します。全中を決めたあの瞬間、周りの先生からの祝福のお言葉、一生忘れません。この場を借りてお礼申し上げます。



「生徒の無限の可能性」を信じ、
努力した結果、目標達成となった。

狭山市立中央中学校男子卓球部顧問
初手 航

④ 全員で決めた最大困難である「夢の全中出場」への挑戦！

川口南中

「全中出場」

昨年の関東大会終了後選手のみならずと立てたこの目標をなんとしてでも達成したくてこの1年、本当に全てを賭けて準備をした。平日は毎日必ず選手8人全員に球出しをすると決めて実行した。土日は毎週遠征、または1日練習。3月から本番の夏に向けて月に1、2回実家に泊めこみ合宿。(実家の父母には感謝しかない。)夫や1歳の我が子も巻き込みながらがむしゃらにやった。目標に向かうにあたり、どこへ行っても「全中に行きたいです。」と言い続けていたら、どんどん縁が繋がって、たくさんの人が力を貸してくださった。自分の中でものすごく勉強になる1年だった。

満を持して迎えた関東大会。結果は、予選リーグを1位で抜け、代表決定トーナメントにまわるも義理の弟が監督を務める学校に負け(笑)、敗者復活戦へ。敗者復活のトーナメントを勝ち抜き、最後、あと1回勝てば全国大会出場！

全国決定戦の相手は栃木1位のチームだった。3人がクラブチームに所属する強い選手がいるチームだった。こちらはラストにエースを置き、強い3人のうちの3番手にあたり、チームとしてはこれ以上ないオーダーだった。「みんなで絶対にラストにバトンを繋ごう」、そう話して試合に向かった。でも絶対にとらなければいけない2本が0-2スタート。内心、「終わった」と思ったが、そこから子供たちが見せた底力がすごかった。ギリギリの勝負を攻めにいって2本とも大逆転の3-2勝ち。ラストにみんなでバトンを繋ぐことができた。広い体育館の中、隣のコートでやっていた決勝や、そのほか周りの試合が全て終わり、全中をかけた、私の学校と栃木の学校のラスト5番だけが残った。観客席をふと見上げると、保護者の応援団の他に、埼玉の他の学校、他県のライバルチームや、他の学校の先生たちが応援してくれていた。会場の雰囲気は、確実に「何か起きるぞ」という「ざわざわ」したかんじだった。1ゲーム目を6でとり、2ゲーム目4-1リード。「もしかしたら行けるかもしれない」そう思った。でも、相手はそんなアウェイの状況でも冷静だった。

結果はラストが1-3で負け、全中出場の夢は掴みかけたと思った瞬間にこぼれ落ちていった。あの状況であっても冷静に戦い切った相手の選手は本当にすごかった。

負けたあと、相手チームとの挨拶が終わり、なんだか安心してしまっていた自分がいたが、観客席に向かい応援してくれた保護者に、キャプテンが震える声で涙を流しながら

「2年半、中学からラケットを握った私たちがここまでこれたのは支えてくださったみなさんのおかげです。本当にありがとうございました。」

と言ったとき初めて私も涙が溢れた。

1年間がむしゃらにやる中で、「これだけやって最後結果を出せなかったら自分は何を思うんだろう」と思っていた。試合が終わり、感じたことは不思議なことに子供達への感謝の気持ちだった。どんな窮地に立たされても諦めないで戦う姿には私の想像を超えた強さがあった。私が1年間、私が心と時間を注いで向き合ってきた子ども達は私が思うよりもずっとずっと強くなっていた。

限りある2年半。偶然同じ部活に入り出会った子供達は、同じ目標を目指す中でいつしか一つになっていた。苦楽をともにし、2年半頑張ってきた仲間と出られる最後の大会。だから必死だし、一生懸命だし、見ている人は心を動かされる。私はいつも一瞬の輝きをそこに感じている。私は自分の出会った子達には、自分の大好きな卓球を通して特別な体験をしてもらえるようにこれからも頑張ろうと思う。

苦い結果となってしまった関東大会だったが、この1年頑張ってきたことに1ミリも後悔はない。全中を目指したから広がった人との繋がりが、深まった絆、貴重な経験があるからである。私の人生においてとても重要な1年だったと思う。支えてくださった周りの方、力を貸してくださった多くの方に感謝の気持ちを忘れず、また前を向いて頑張っていきたい。



「自分たちの力だけでは目標は達成できない。」周りの多くの方の協力や支えがあってこそである。逆に、周りから応援されるチームは色々な意味で強い。毎年そんなチームになれるよう頑張りたい。

おまけ…

今回、全中を目指すにあたり、学生となった昔の教え子たちがたくさん教えにくってくれた。県大会、関東大会にも応援に来てくれて一生懸命声を届けてくれた。負けた後、涙を流す選手達に向けて「お前らよく頑張った、本当に最高のチームだったよ、俺はお前らと卓球できてすごく楽しかった、ありがとう」と同じく泣きながら声をかけてくれた。まるでドラマのワンシーンのようなこの場面は多分一生忘れないと思う。

お互いに卓球を続ける限りこうして元教え子たちとも一緒に青春ができるのだから、**卓球指導はやはりやめられない。**

川口市立南中学校女子卓球部顧問
藤原 麻衣

⑤「部活動選手・クラブ選手の力を合わせて念願の全中出場！そして3位入賞までの軌跡

越谷富士中

【はじめに】

私自身プレーヤーとしては、中学で卓球を始め、県大会に出場することはできましたが、関東や全国といった大会とは無縁の人間でした。関東中学校卓球大会(関東大会)を実際に見たのも、顧問になってしばらくしてからのことでした。

経験の浅い私ですが、多くの皆様に支えていただいたお陰で、顧問として初めて念願の団体での全中出場、さらに3位入賞を果たすことができました。拙い文章で恐縮ですが、これまでの関東・全中での思い出を振り返りたいと思います。

【関東大会との出会い～2017 埼玉関東～】

私が初めて見た関東大会は、平成29年、私の地元越谷で行われた埼玉関東のときになります。きっかけは、練習試合などでお世話になっていた北川辺中の小井戸先生から、「埼玉関東の運営を手伝ってこないか」と声を掛けていただき、県中体連卓球専門部の常任委員になったことでした。地元の役員ということで、宿泊の手配や開会式などの式典といった仕事を担当させていただきました。初めて目にした関東大会は、当然ですが地区大会や県大会とは大きく異なっていました。各都県の上位チームが集まった大会とあって、卓球のレベルが高いことはもちろんのこと、応援などの雰囲気力が強く、チーム力の高い学校ばかりで、大きな夢の詰まった大会だと感じました。「いつか自分のチームの選手をこの舞台に立たせてみたい！」と強く感じました。

【初めての関東出場～2021 東京関東～】

大きな転機は2020年、越谷富士中に異動したときでした。新任の頃からお世話になっている地元クラブと連携して「2025年埼玉関東での団体全中出場」を目標に、全国への挑戦が始まりました。

翌年の学総県大会で女子団体優勝を果たし、2021年の東京関東で顧問として初めてチームの関東大会出場が実現しました。しかし、関東大会で勝ち抜くことは、当然ながら容易なことではありません。第1ステージの接戦を制して第2ステージに進むことができましたが、私自身子供たちとともに初めての関東大会のベンチの雰囲気に圧倒されてしまい、子供たちの健闘虚しく代表決定トーナメント2回戦で敗退となりました。

初めての監督としての関東大会を経験して、全中に進むためには以下4つのポイントが必要であると考えました。

- ①選手たちには、関東大会を勝ち抜く実力がついている(当たり前のことではありますが)
- ②チームが、できる限り高い順位で県予選(県大会)を勝ち抜いている
- ③監督や選手たちが、関東各都県の関東大会出場チームの状況を把握し、分析できている
- ④監督が適切にチームや選手たちのマネジメントができている(監督やチームの強運も必要!?)

以上のことから、監督としてチームを全中へ導くためには、相当な覚悟と努力が必要であると思います。これが関東大会の難しさであり、面白さでもあると思います。

【念願の全中出場へ！～2024 群馬関東～】

その後、2022千葉関東、2023山梨関東と悔しい敗戦が続き、2024群馬関東への挑戦が始まりました。この1年は、上に挙げた4つのポイントを意識しながら、苦手選手やチームを作らず、自信を持って関東大会を勝ち抜くことを目指し、遠征を重ねて各都県の強豪校と数多く試合をさせていただきました。今回は、クラブ5選手、部活動3選手というチーム構成になったので、ダブルスを部活動2選手ペア、クラブ2選手ペア、部活動1選手+クラブ1選手ペアなど、ダブルスのペアリングを工夫することで相手チームに合わせたオーダーを組むようにしました。また、クラブ選手が苦手意識を持つことの多い異質(粒やカットマンなど)の選手に対応できるよう、部活動の生徒たちはシェークバック粒(表)やペン粒、カットマンを多く作り、クラブ選手が学校の練習に参加する時には異質選手と多く練習するなど、徹底して苦手選手やチームを作らない工夫をしました。

関東の各都県のチーム状況を把握・分析して臨んだ春の関東選抜大会では、これまでの取組と、子供たちの頑張りによって優勝することができました。特に、ダブルスのペアリングの工夫によって登録8選手が全員1回以上出場し、関東選抜大会という大舞台で全員が1勝以上できたことは「全員卓球」でチームにまとまりが生まれ、選手たちの自信にも繋がったと思います。その翌週群馬で行われた全国選抜大会でも、予選リーグを勝ち抜き優秀チームとして表彰していただきました。

そして夏、いよいよ勝負の群馬関東を迎えました。「今年こそは全中へ！」という強い思いは、私も選手たちもまったく同じで、1戦1戦チーム全員が自分のやるべきことに集中して丁寧に戦いました。第1ステージでは地元群馬・前橋七中、いつも大会等でお世話になっている東京・春江中に勝利し、東京関東以来3年ぶりに第2ステージへと進みました。異質選手の多い第1ステージでしたが、子供たちはこの大舞台を楽しみながら戦い抜き、これまでの取組の成果がよく表れた内容でした。しかし、全中への壁はやはり厚く、第2ステージ1回戦で栃木・陽北中に何とか勝利したものの、これまでの練習試合等で0勝3敗と勝利したことのない群馬・みなかみ中に2回戦でまたも敗れ、1回目の全中出場のチャンスを逃してしまいました。チャンスは代表決定トーナメントの1回を残すのみ。悔しい思いで観客席に戻ると、応援に来てくださった保護者の方々や埼玉県の方から多くの励ましのお言葉をいただきました。多くの方々に支えていただいたお陰で、切り替えて代表決定トーナメントに臨むことができました。選手たちも、みなかみ中の敗戦を引きずることなく、「全中へ行きたい！」という

強い思いが1人1人のプレーに繋がり、代表決定トーナメントを着実に勝利して5位で念願の全中出場を決めることができました。富士中女子卓球部としては2010年以来の団体全中出場。これまで10数年卓球部の顧問を務めさせていただいて、自分たちで立てたチームの目標が達成できたのは初めてのことでした。言葉では言い表せないくらいの喜びを、子供たちと味わうことができました。

【チームの総力で3位入賞！～2024 新潟全中～】

新潟全中が始まりました。チームの目標は「第1ステージ突破・優秀13校表彰」です。第1ステージでは滋賀県の近江兄弟社中、石川県の川北クラブと試合をさせていただくことになりました。全中の第1ステージは全試合5番手まで5ゲームスマッチで行われること、また関東5位かつシングルス全中出場者ゼロという富士中の戦力からしても、1戦1戦苦しい戦いが予想されることから、5番手まで勝負が回ってくることを想定した選手采配をしました。特にダブルスは、関東大会の団体でも全勝し、富士中の全中出場のために活躍してくれた3年生のクラブ2選手ペアを起用し、確実に1点をチームに持ち込んでくれることを期待しました。そして見事、3年生ダブルスが2試合とも丁寧なプレーで接戦を制し、さらには3年生の部活動選手もシングルスで1勝。2年生シングルの活躍もあってチームが2勝して優秀13校表彰となりました。

私はよくチームに、「チームの主役は3年生。たとえエースが1年生や2年生であったとしても、チームの勝敗の責任は3年生にある。3年生はチームのために責任を持って全力で戦い抜くこと。下級生はその3年生を全力で支えること。」と話をしています。今年の富士中は、3年生4名、2年生4名というチーム構成。3年生にとっては、本当にこれで最後の大会です。私は大会中、3年生には「悔いなくやり切ってほしい」「この大舞台を全力で楽しんでほしい」と言葉を掛け続けていました。2年生たちも、3年生と1日でも長く一緒に戦うことを目標に、力を尽くしてくれました。そして、チームの主役である3年生たちの見事な活躍によって、優秀13校を達成することができたのでした。

第1ステージの試合終了後、第2ステージ抽選会が始まりました。今大会では各チームのキャプテンによる抽選です。関東ブロックの5校が第2ステージ進出となったため、同ブロックのチーム同士が1回戦で当たらないように、ということで最初に関東ブロックからの抽選となりました。観客席で抽選を見守る選手たちは、「もう一回みなかみ中とやりたい！」と話していました。すると、3年生キャプテンはみなかみ中が下に入った一発ベスト8の場所を引き、再び対戦するチャンスがやってきました。

第2ステージの1回戦、みなかみ中が接戦を制して2回戦で「みなかみ中対越谷富士中」が実現しました。通算0勝4敗、5度目の挑戦です。子供たちの「今度こそ勝ちたい！」という思いの強さは、監督としても非常に頼もしいものがありました。1番手が3-2で接戦を制し、2番手は相手のエースに負け。ここまで活躍している3年生ダブルスと4番手の2年生エースに託すことになりました。ここでも3年生ダブルスが大活躍で、これまで一度も勝利できなかったみなかみ中ダブルスに、丁寧なプレーで3-1勝ち。4番手の2年生エースが安定した戦いで勝利して初めてのみなかみ中勝利、準決勝進出となったのでした。一度も勝利したことのない格上のチームに、この大舞台、ラストチャンスで勝利することができたことに、子供たちは笑顔で溢れていました。数多くの悔しい経験を乗り越え、チーム全員が地道に努力を重ねてきたこと、そして思いの強さが、今回の結果に繋がったと感じています。

そして翌日迎えた準決勝の四天王寺戦。埼玉の先生方も応援に駆けつけてくださり、多くの方々に見守っていただく中、毎年全中で活躍する学校との夢の試合が始まりました。当然ながら実力は遙か上を行くチームでしたが、子供たちはどの試合も果敢に挑戦していました。プレーや応援からは、また8人で一緒に戦うことができるという喜びが感じられました。残念ながら0-3で試合終了となりましたが、チーム全員、やり切ったという清々しい表情をしていました。この試合をもって越谷富士中の3位入賞が決定、3年生は引退となりました。

埼玉勢の全中団体3位は、1996(平成8)年以来28年ぶりとのこと。しかも、そこで3位に入ったのは越谷富士中男子だったそうです。これも、何かの縁があるのではないかと強く感じました。



富士中の全国3位という結果は、これからの、クラブと部活の融合という新たな部活動のあり方のひとつとしての未来の形なのかもしれない。

【こんなエピソードもありました！～横井選手、大堂選手との繋がり～】

今年の6月頃、富士中に一本の電話がありました。富士中卒業生の阪本さんという方で、富士中卓球部の関東選抜優勝、全国選抜出場と春の大会での活躍をネット等で見てくださり、「卒業生として、母校に何か協力できることはありませんか？」と連絡をくださったのです。「今年こそ全中出場を、と考えているので是非お願いします！」と依頼したところ、なんと横井咲桜選手、大藤沙月選手が練習を見てくださる、という企画が持ち上がりました。

実は、阪本さんは、地元・越谷で整骨院を経営する傍ら、2選手のトレーナーをされている方だったのです。四天王寺中から全中出場経験があり、世界で活躍する横井選手、大藤選手から少しでも力をお借りできれば、全中出場が叶うかもしれないと思い、何とか今年の夏の大会前に来ていただけないかお願いしました。そして、7月上旬、海外遠征の合間を縫って阪本さんがお二人を富士中に連れて来ていただき、講習会が実現しました。

平日の放課後という限られた時間でしたが、横井選手、大藤選手は部員1人1人に細かな技術や体の使い方など、優しい声掛けをしながら分かりやすく教えてくださいました。試合もしていただいたりと夢のような時間となり、またとない貴重な機会に子供たちは大喜びでした。

四天王寺中出身のお二人のお陰で、今年の四天王寺中対越谷富士中の試合が実現したと言っても過言ではないと思っています。阪本さん、横井選手、大藤選手には感謝しかありません。本当にありがとうございました。



「自分たちの力だけでは目標は達成できない。」周りの多くの

【もう一度あの舞台へ！～2025 埼玉関東に向けて～】

今回の群馬関東、新潟全中では、多くの方々が支えてくださったお陰で、選手たちも私も素晴らしい経験をさせていただきました。来年はいよいよ埼玉関東となります。2年生の新チームは、これまでお世話になったすべての方々への感謝の気持ちを大切に、再び全中という大舞台に立つことを目標にスタートしました。チーム全員が地道に努力を重ねてきたこと、そして思いの強さが今回の結果に結びついたことから、前チームの「全中3位」という結果にこだわりすぎることなく、来年もあの舞台に立てるように、強い思いで努力を全員で続けていくことが大切であると考えています。私自身も、埼玉関東の成功と新チームの目標達成に向けて全力を尽くしていきます！

越谷市立富士中学校男女卓球部顧問
芳賀 貴裕



Table tennis specialty department
Saitama Junior High School Physical Culture Association

卓球でしか叶わない“夢、がある。

だから、いま卓球をしよう。

埼玉県中体連卓球専門部のサイトに専門部で作成した
キャッチコピーがあるので、可能な方は印刷して卓球
場に掲示をお願いします。

卓球はコロナに負けない



埼玉県中体連卓球専門部

今回の特別号はいかがだったでしょうか？

専門部の先生方もそれぞれが様々な目標を持って3年間近く部活動指導を行ってきた中で多くの印象に残った試合や世代があることがわかりましたね。その中には、いざ関東大会出場など上位大会への出場がかかる大事な試合で今まで練習してきたことをすべて出し切った勝利や、ずっと入部の時から近い距離で指導してきた中でとても幼かった生徒たちが大きく成長して、地区大会で顧問に初優勝をプレゼントしてくれたり（顧問号泣）、指導者が若く、技術指導にまだ自信がない時代に選手達はそのマイナス部分を補って頑張り、目標だった県大会出場に導いてくれたり、執筆していただいた**先生方、それぞれに感動の素晴らしいドラマ**があったと思います。きっとこのマガジンを読んで頂いている読者のみなさん

にも。そして今年も暑い夏が始まります。はたして新しいドラマが生まれるか。ではまた次号でお会いしましょう！

速報

令和8年2月21日(土)に新座市立第二中学校にて「令和7年度埼玉県中学校卓球研究協議会」が今

年度も開催されます。詳しくは夏以降に卓球専門部ホームページにアップされる要項等を参照願います。

内容は昨年度に引き続き、**分科会と全体会(指導者講習会)**を予定しております。なお全体会には男女通算関東大会団体出場埼玉県歴代最多を誇る**埼玉県が誇る大御所であらせられる大塚純先生に講師**をお願いしております。

また、今研究協議会も**卓球指導初心者の先生～県大会の上位や関東大会を目指す先生方まで幅広く、すべての先生方が対象**となっております。多くの先生方のご参加をお待ちしております。

※もし関東各都県で希望される先生方は、**埼玉県中体連卓球専門部騎西中学校 小井戸までお問合せください。**

過去の参加実績！

★令和5年度参加者**51人**参加！

★令和6年度参加者**57人**参加！

★令和7年度参加者**50人**参加！

昨年度は、一昨年度と同様に目標レベルは5段階で**5分科会**を開催！

- ①市・地区大会で1回でも多く勝利するための指導法
- ②市・地区大会で上位進出し、県大会に出場するための指導法
- ③県大会に出場して1～2回勝つための指導法
- ④県大会でベスト8に進出するための指導法
- ⑤県大会上位進出し、関東大会に出場するための指導法でした。今年度はどんな形になるかこうご期待です。